

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 三・一一から学ぶキリスト者の災害応答(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：分科会報告 F)   |
| <b>Author(s)</b> | Jonathan, Wilson  |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 147-148  |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4927">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4927</a> |
| <b>Rights</b>    |   |



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

### 三・一から学ぶキリスト者の災害応答

ジョンサン・ウイルソン

『神の忍耐の時』の中で、苦難の救い主に仕える」と題した主題講演の中で、リチャード・マオ先生はこのように話している。『共にいる』ことは、キリスト者の特徴的な行為である。特に日本の状況のように、キリスト者が少数者としてサブ・カルチャーを形成している社会文脈の中で『共にいる』行為を育むことは、きわめて重要である」（本書六四頁）。憐れみを持つて、苦しんでいる方に寄り添うことは日本で伝道するに最も有効な姿勢かもしれない。しかし、マオ先生は続けてこう言っている。「私たちは、自分が属している、より大きな文化との関わり方を理解する時、二つの基本的な選択肢に限定する傾向を持つているようだ。それは、公共への参与から身を引くか、それとも、公共の場を乗っ取ろうとするか、という選択である」。日本の教会は明らかに前者を選び、全体社会から進んで孤立した。マオ先生は第三の選択肢があると言う。それは、社会を接収せず、その社会に留まることである。これは、反逆的な人間を愛すという神様の苦しみと御心を共用することから始まる。

この「留まる」という選択は一番難しくも、最もキリストに近い行動である。しかし、これは解決法ではなく、神様

のご計画内の一步である。神様ご自身も、罪深い人間と向き合う際に、私たちと同じ選択肢がある。例えば、この世を見捨て、別の世界を作るのは可能であった。または、イエス様を送り込み、すぐに世界を裁き、制することも可能であった。しかし、神様はイエス様が人間と寄り添うことを願い、地へ送った。こうして、信じる者を救うという選択肢を増やした。最終的には神様はすべてを裁き、制するが、それまでの間、私たちは神様の忍耐の中にいるのである。

このように、クリスチャンとして社会と信仰的な交流を持つにはどうすればいいのか。私たちには今、一つの大きな発展を遂げるチャンスが与えられている。それは、東日本大震災から学んだことを、それぞれの地元で実践していくことである。私たちクリスチャンには、他が提供できない賜物や恵みがあることを自覚しなければならない。東日本大震災国際神学シンポジウムで藤原淳賀先生は、今は日本社会がキリスト教に対して心を開いているまれな時期だと言われた。過去三回、キリスト教が日本社会に浸透するチャンスがあった。そして今四度目のチャンスを迎えている。過去においては海外からしかキリスト教が日本社会に入る由がなかったため、必然的についでくる西洋文化や富ばかりが吸収され、キリスト教はあまり感心を引かなかった。しかし、今回は、日本社会の中からキリスト教が広められている。日本社会が必要としている海外からの物質的なニーズのついでではない。私たちは福音の「希望」という本質をメッセージとして届けているのである。周りで苦しんでいる人たちに寄り添い、話を聞き、苦しみを共にすることでその人たちにキリストの希望を届け、分かち合うことができるのである。震災の被災者だけではなく、いじめに巻き込まれている家庭や、引きこもっている若者、自殺願望を抱くすべての人、虐待されている女性、孤立してしまっている高齢者など、たくさんの方が「希望」を必要としている。その人たちを教会に連れて来るのではなく、私たちが教会として人々のもとへ行き、寄り添う時なのである。